

あるかのように休講もせず毎週通い続け、又式先生や家政学部の前ひろ子先生に后餐会を Grill で開いて戴きもし、昼食の後、赤い顔を気にしながら恩師の辻村太郎先生のお宅をお訪ねしたこともあった。

今でも緑濃い窪町界限のお茶大生の往き来するなごやかな通りの風景や、講義中に聞こえてきた高師付属のグラウンドからのザワメキを時々憶い出しては一人で懐しんでいる。

(山梨大学)

変動帯の地形学

吉 川 虎 雄

W. M. Davisの浸食輪廻説が世界各国に与えた影響を評論したR. P. Beckinsaleの論文(Geogr. Rev. 66, 1976, 448—466)には、日本やニュージーランドにおいてDavisの学説が歓迎されたと述べられている。その記述は大筋において正しいが、1976年に書かれたものとしては、その内容にいさゝか抵抗を感じざるをえない。しかし、よく考えてみると、このように評論されても、それに全面的に反論できない点のあることも事実である。

基本的には急速な隆起とそれに引続く長い地殻の安定期の存在を前提として構築されたDavisの浸食輪廻説は、本来地殻変動の活潑な日本やニュージーランドにおいてその妥当性が吟味され、改訂されるべき性質のものであった。まして日本では、Beckinsaleものべているように、Penck父子によって提唱された地殻変動と浸食とが同時に作用して展開される地形発達理論がよく知られていただけに、Davisへの傾倒が大きかったことは理解に苦しむところであろう。

これに対して、日本やニュージーランドでは、地殻変動によって形成された変動地形の研究分野において、世界的に見てもすぐれた業績があげられており、地殻変動論や地震予知などにも貢献しているという声がある。しかし、変動地形もその形成過程においてたえず浸食作用をこうむっていることを見逃すわけにはいかない。そして、変動地形の研究成果から地殻変動論に言及するに当たって、その形成過程に作用した浸食の効果を検討しなければならない場合も多い。したがって、変動地形の研究を変動帯における地殻変動と浸食作用とによる地形発達の理論——これを変動帯の地

形学とよぶことにする——にまで発展させることによって、地殻変動論などへの寄与も一そう大きいことが期待されるとともに、浸食輪廻説を克服する途も拓けるであろう。しかし、日本における地形研究の現状は、その段階に達しているというには程遠いものがある。

このように書いてくると、あたかも地形研究の局外にあったものが日本の地形学に加える批判のように聞えるかも知れない。しかし、私は約40年間地形研究にたずさわってきたものとしての反省をこめてこの小論をしたためているのである。私は、異なる前提に立ったDavisとPenck父子の理論の対立が約半世紀前に不毛のまゝに終り、その後この点について研究の進歩がほとんどなかったのは、地殻変動や浸食作用による地形変化の速さが定量的に考察されなかったところに、その一因があると考えている。近年これらの作用はあるていど定量的に論ぜられるようになったから、変動帯における地形発達を改めて考察することも可能であり、それは地形研究に新生面を拓くものとなるであろう。

昨秋からちょうど30年ぶりに、場所は変わったが、お茶の水の教壇に立って、再び地形学について語るようになってから、その間における地形研究の歩みを顧みることが多くなった。そして、本来日本において開拓されるべきであった変動帯の地形学がいまだにその形をととのえていないことを、自責の念をもって考えるようになった。DavisやPenckはとっくに乗り越えたような勇い声をきくこともあるが、変動帯の地形学が確立されるまでは、日本における地形研究がDavisやPenckの

理論を克服したとはいえないのではないだろうか。来しかたを顧みて己の歩みのおそさを悔み、日暮れて道遠しの感が強いこのごろである。「昔話は老いたる証」と多田文男先生からしばしば聞

かされた。過ぎし日の無為を悔む私は、はや老いたのであろうか。

(1983年1月15日記 東京農業大学)

「現代社会」を担当して

荒井和子

この3月で都立高校の教師になって15年になります。教材研究にはいつも頭を悩まし、年中国際情勢にも気をつけていないと、ミスを犯してしまいます。その上地理だけを担当するわけにいかず、今年は例の「現代社会」に専念することになりました。「現代社会」とは一体何でしょう。地理、世界史、日本史、政治・経済、倫理・社会などの分野をあわせた総合社会科だということです。しかも、これはぜひこのような教科が必要だという教育現場からの声があったわけではなく、文部省の教育課程改正で、ぱっと出てきた教科です。しかもこの現代社会だけが必修で、1年生に学年指定され、他の地理、日本史、世界史などは選択で良いということに決定されてしまったものです。そのため一番影響を受けたのは地理教師です。多くの高校では地理は必修をはずされ、選択とされ、地理教師は代りに「現代社会」を担当することになりました。その上同じような条件にみえながら、世界史、日本史は、地理よりずっと選択者が多く人気があります。それは生徒にとって教科そのものに知的興味や、親しみが深いからということもありますが、それにもまして、受験に有利だからということで歴史をえらぶのです。その理由は、まず共通一次において、例年地理の平均点が歴史や政経・倫社より低いこと、また少ない地理受験者が、さらに地理AかBかに分かれること、また私立の有名大学で、社会の受験科目を歴史だけに指定して、地理では受験できない大学があることなどです。それで常に、少数者の悲哀を地理教師は感じているのです。

さて高校社会科はどうあるべきか、受験のこと教員構成のことなど、種々検討の結果、私の勤務

校では表のような教育課程に決まりました。私は、週4単位の「現代社会」を担当しています。「現代社会」1年目だからといっても、生徒一人一人にとっては、各々一回限りの「現代社会」の授業になるわけで、やり直しはきかぬわけです。自分の力不足をなげきつつ、授業に取り組まざるをえません。簡単な表で、今年度の授業で力点を置いたところをしめしてみました。

この他、一人一人に週2回、5分間時事スピーチを並行して発表させています。

やはり南北問題を扱うときや、国際問題を扱う際には、中学時代だけの地理知識だけでは、不足だということを痛感しました。特に欧米に比べ、アジア・アフリカ・ラテンアメリカに関する理解が乏しいことが目立ちます。地理を学ばずに、高校を卒業していく者がふえていくかと思うと、残念な気がします。しかし、今の私としては、力いっぱい手探りでも、学びつつ、「現代社会」の授業に取り組まざるをえないといったところです。

＜昭和56年度入学生まで＞

1 年	地理 3
2 年	世界史 2, 倫・社 2
3 年	世界史 2 日本史 3 政・経 2
選 択	世界史特論 日本史特論

＜昭和57年度入学生から
予定＞

1 年	現代社会 4
2 年	世界史 4
3 年	日本史 4 または 地理 4
選 択	世界史特論 日本史特論 その他